

ホームページ <http://www2.ttcn.ne.jp/ref-pj/>

内容

* リフレッシュセミナーin 東京 2019 講演の報告

第4回 イタリアの精神保健福祉

～精神保健福祉交流促進協会が教えてくれた日本とイタリアの挑戦(2)～

西南学院大学非常勤講師 坂本 沙織

* 事務局からのお知らせ

○ 7月号原稿のお願い

* リフレッシュセミナーin 東京 2019 講演の報告

昨年6月29日に開催しましたセミナーの講演内容を3月号から報告してまいりましたが、4回目となる今月号は最終回で坂本先生の後半のご講演内容となります。是非ご覧ください。

第4回 イタリアの精神保健福祉

～精神保健福祉交流促進協会が教えてくれた日本とイタリアの挑戦(2)～

西南学院大学非常勤講師 坂本 沙織

夜遅くまで食事会があったのに、翌日ダルコ先生は張り切って違う都市も視察させてくれました。違う都市と言っても同じ県内の別の精神保健センターを見せて頂きました。ダルコ先生は色々なところを見せたいので、ヴァルディキアーナ地域のセンターに行きます。

それでここは余暇活動センターです。救急病院に行つて精神保健センターに行つて余暇活動に行くという流れになります。

これが救急病院です。どこの都市に行つてもやることは大体一緒なのです。この動きを基本として見ているのです。

そして食事をして、やはりこれがイタリア人の気質ですね。美味しい食事を食べて終わります。

■アレツツオ2日目 (アレツツオ県のもう一つの都市)

ヴァルディキアーナ地域の余暇活動センターの視察



■アレツツオ2日目 (アレツツオ県のもう一つの都市)

ヴァルディキアーナ地域の総合病院の中の精神科救急病棟を見学、視察



■アレツツオ2日目 (アレツツオ県のもう一つの都市)

ヴァルディキアーナ地域の取り組みについて説明と視察



精神保健センター
自体も独立せず、
いつでも他科と連
携できるように、
同じ建物にある
(トリエステと
ヴェローナとの
違い)

■アレツツオ2日目 (アレツツオ県のもう一つの都市)

そして最後はおきまりのお食事会



それで研修がひと段落付いたかなと思うと、仁木さん達は必ず素晴らしい休息日を入れてくれます。フィレンツェですね。中村さんがいますね。私は疲れ過ぎて参加できなかったのです。写真を見て楽しそうなので一緒に行けばよかったなと思っています。

またヴェローナに戻りました。これは追加することでは無いのですが、またプレゼントの写真です。本当にブルチ先生はこれがすごく楽しみなのですね。それでブルチ先生の説明スライドまたまた毎年毎年パワーアップしています。

ヴェローナでは2007年に参加した時と2014年に通訳した時で違いがありました。精神保健センターが新しくなっていて、そこを見せて頂きました。ヴェローナの場合は精神保健センターと余暇活動センターが併設されています。ここでヴェローナの追加する部分は終わりです。

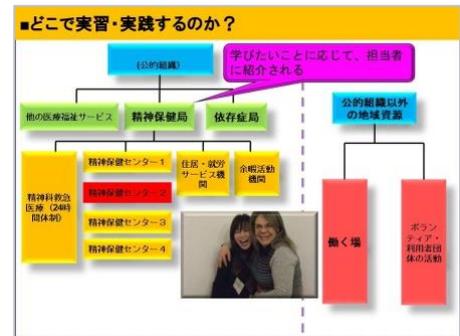
それでアレツォの2015年での追加する部分なのですが、ダルコ先生が毎年ヴァルディキアーナ地域では別の精神保健センターを見せたいという事で必ず違うところに連れて行ってくれます。コルトーナ市にあるセ

ンターなのですが、ここをダルコ先生が見せたいという理由が凄く分かりました。それはヴェローナでもトリエステでも精神保健センターは単独で存在しています。しかしアレツォだけは精神保健センターさえも孤立させないという考えで、他の科、内科、小児科、産科・・・の中に入れましょうという考え方があるので、一つの建物の中に他の科と一緒に精神保健センターが入っています。多分ダルコ先生はこの事を強調したくて見せてくれたのだと思います。

精神保健センターの中ではお薬なども見せて頂きました。私も精神保健福祉士なのですが薬には皆さんあまり興味を示されないのですね。しかし参加者には必ず Dr.がいらっしやるので、この時は窪田先生がご一緒でしたが、薬には大変興味を示されていました。こんな古い薬使っているの・・・私には分からないのですが、その様な話がありました。(質疑応答の時間に窪田先生から訂正があり、帰国して写真から薬剤を調べてみたところ、片方の棚にあったのは最新の薬剤であることが分かったとのことです。)

それでやはり見せてくれるのは精神保健センターだけではなく、余暇活動センターや社会協同組合などもセットで見せて頂きました。

この様に研修はとても充実しているのですが、参加



者にとっては覚えられなくて、今どこを見ているのかな？というのがちょっと分かり難いかなと思うので、私が通訳していて気を付けたのは、いま研修をしているところはスライドの中のどこの場所ですよ。というのを伝えるようにしました。

ここ迄で 2007 年と 2014 年 2015 年の話は終わるのですが、ここから私の話を少し入れさせていただきます。なぜかという、イタリアのツアーの中で参加者が一番知りたいのは、説明も良いけれど、やはり実際の支援が見たいのですね。ただ行くところ行くところ利用者はいないのです。具体的な支援というのは如何になっているのだろうか？という事で知りたいかなと思ひ、これからは私の実習での話をしたいと思ひます。

トリエステですね。トリエステという場所をあまり好きではない方もいると思ひます(すこし対応が冷たいので)。ヴェローナとかアレツォと違ってちょっとサラッとしているので、あそこは行かなくて良い。という方は一杯いらっしゃるのですが、長期間入るととても良いところです。私は精神保健局に行って「学びたいのです。学ばせてください。お金もありません。」と言ったら住む場所を与えてくれて、実習もさせてくれました。「あなたはどのくらいの期間で何を学びたいですか？」という事を聞かれ、そして担当者をつけてくれました。私は就労に興味があったので、就労リハビリ専門員の方を付けていただきました。

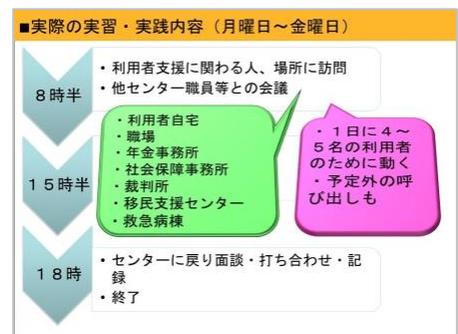
住むところですが、トリエステの余暇活動センターには時々、具合が悪くなってもグループホームが一杯で入れない利用者さんが 1 か月とか 3 ヶ月住める部屋があります。半年の方もいらっしゃいました。その時、私は学生で本当にお金が無かったので、そこに隣の部屋で良ければ入って良いよと言われて、一緒に住まわせてもらいました。そしてここで食事もさせていただいて、住居費と食費を浮かせて勉強させていただきました。

何をするかですが、イタリア人はのんびり働いているイメージがあると思うのですが、実はとてもよく働きます。朝は実習担当者に 8 時半には必ず精神保健センターに来るようにと言われ、「来なかったら置いて行くからね。一杯予定あるからね。」と言われていました。朝 8 時にはセンターに行って朝ご飯を食べます。何故かという食事代を浮かせるためセンターでいただきます。利用者さんと一緒に食べます。利用者さんの中には、食事が食べたくて来ている人もいます。8 時半にはセンターに行き 4~5 時間、色々なところに訪問して一気に働きます。そしてお昼には帰ってきてセンターの会議に参加、そして午後また動きます。

日本人の方が一番知りたいのは、利用者さんとどの様に接しているのかな？という事だと思ひます。

私が付いていたのはリハビリテーション専門員という方なので、訪問する場所は利用者さんの自宅、職場、あとはスライドにある様なところです。1 日に大体 4~5 名の方のために動きます。ところが予定外の呼び出しもあります。この話はあとでします。

どのように動くかという、これは多分世界共通なのでしょうけれども、リハビリテーション専門員 1 人では動きません。わたしは、車のカギをパッと渡して、車に乗ります。利用者さん A に関しては心



理士さんが乗り、他の利用者さんの時は心理士さんが抜けて医師が乗る、次は医師が抜けて看護師が乗る、というように 4 時間の間、車で行ったり来たり、次々に違う専門職が乗り降りしながら仕事をします。ある時は車を使わないで医師と利用者さんの就労についてバールで会議をします。その後センターで利用者さんと面談をするので、その前にバールで会議をしていました。

具体的な支援ですけど、私が実際に付いたのはリハビリテーション専門員ですが、その人一人だけで動くことは殆どありません。大体医師とかと一緒に動きます。その話を少しします。

26歳の女性で自殺未遂、3階から飛び降りたのです。3階というのは死ぬか死なないかの微妙な高さですよ。一般の総合病院の救急に運ばれたのですが、自殺なので危ないという事で病院からセンターに連絡が来て、私と私の指導者(リハビリテーション専門員)、医師で駆けつけて、その場で面談をするという対応になりました。

もう一人は就労訓練中で、ホテルで働いている方なのですが、3日前に職場の方から電話があり、「本人の目の動きが変なのと3日連続で休んでいるからチョットおかしい。」という事でした。その後面談が入っていたので、まだ大丈夫という事でそのままにしておいたら、家族から電話があって「家で暴力をふるっているから直ぐ迎えに来て！」と言われて、私と私の指導者と医師と心理士でその時は出かけました。この様に殆んど一人で働くことは無く皆で働いています。ここで言いたいのは対応が早いです。いま救急病院に入ったとしても、直ぐに就労プログラムを組みます。こういうところが良いのか悪いのか日本人だったら少し考えるところかもしれません。ここ迄は私と私の指導者とが必ず一緒に動いた案件です。

もう一つだけ、私がある程度こなせるようになると、「これ担当して」と言われます。その時この案件は一番きつかったのですけれども、「家族に暴力をふるう人がいる」と呼び出されたので家に医師と指導者と心理士と一緒に行きました。そのご説得して先ず精神保健センターに連れてきます。薬物を使っている可能性があるので検査をします。「検査結果が出るあいだ 30分精神保健センターに置いておいて」と言われ、カギを掛けることできないから、「とにかく結果出るまで彼を説得して 30分間センターに置いておいて」と指導者にいわれるので、ここからが私一人の仕事です。何で私がしなくてはいけないのかと思うのですが、学ばせてもらっている以上、私よりこんな背の大きな人に「待ってね」「待ってね」「あとチョット」「待ってね」、先方からするとバカバカしいですよ。こんな訳の分からない日本人に待ってね待ってね、とされているので、でもあまりにバカバカしくて、待っていてくれたのです。これが一回成功すると月に 3-4 回位頼まれるようになりました。後は穏やかな仕事です。就労訓練中の利用者さんの就労後の支援で、就労後の過ごし方がうまくできない利用者さんや就労後具合が悪くなったりする利用者さんの余暇活動に同行していました。後は、利用者さんの不安軽減で呼ばれることがありました。「これは坂本さん一人でできるからやって」と言われて女の子の家に一人で行っていました。

それで訪問は大体 18 時位に全てが終わります。それからが私



■支援に関わった人 (坂本単独例)

- 緊急対応: 家族への暴力後の鎮静
- 計画的: 就労訓練中利用者の就労後支援
- 利用者要望: 利用者の不安軽減



■実際の実習・実践内容 (月曜日～金曜日)

- 0時: 精神保健センターへ、利用者と朝ごはん、指導者と合流し、車で移動
- 0時半: 利用者支援に関わる人、場所へ訪問、他センター等との会議
- 1時: 記録、整理、聖餐
- 1時半: センター全体会議(気になる利用者ピックアップされ支援方法確立される)
- 1時45分: 利用者支援(支援に関わる人、場所へ訪問)
- 1時55分: センターに戻り重談・診察同行・記録
- 1時58分: 終了
- 2時: 水曜活動参加



■実習・実践内容 (平日夜・土日)



の本当に大事な時間でした。それはトリエステでは余暇活動を凄くやっているの、それに参加しなさいと言われていました。それをしないと駄目だと言われていたので、余暇活動に必ず参加しました。平日の夜、食事に行ったり、パーティがあり日本人だから出て、と言われてたり、写真は土日に統合失調症の方を連れて山に行った時で、薪割りもしました。

それで何が言いたいかというと、ずっと研修のあいだ言われていたのは、日本でも当たり前に行われているのでここで改めて言うまでもないのですが、「医療は基礎的にある。でもそれだけでは生きていけないから、必ず住居と就労と余暇活動をセットで、ずっと考えていきなさい。」これをずっと言われていました。

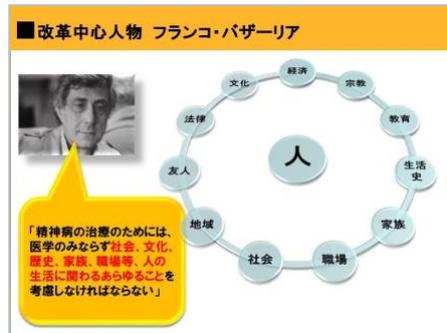
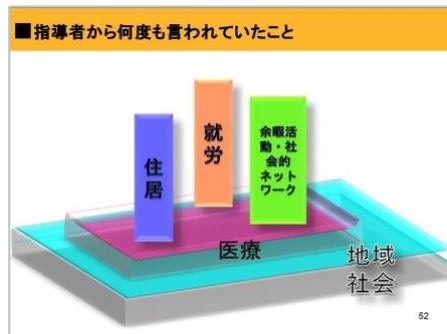
それは多分もう昔からバザーリアさんが、そう思って活動されていたと思うし、これはブルチ先生の資料を使わせていただきましたが、ブルチ先生も今も同じことを言われる訳です。ネットワークが一杯繋がって、それを全部使ってこそ、人の人生の支援ができるのだ。と言われるのです。

それでダルコ先生も同じことを言われます。これはダルコ先生の資料を使わせていただきましたが、イタリア語で申し訳ありませんが、書いてあることは全部、病院があってアソシエーションがあって就労があって宗教があってとか、今も昔も言っていることは一緒に、そのために実現をしているのです。

それで先ほどイタリアでの私の経験を話しましたが、暴言をふるっている人を安定させる仕事って、正直言って日本でやっていると変わらないのです。スケールとかシステムが違うかもしれませんが、利用者さんに対して日本でやっている支援と変わらないと私は感じたのが正直なところ。むしろ日本でその経験を持っていないとイタリアでも出来なかったと思うので、利用者さん対応はむしろ心優しい日本人の方が優れているのではなかとと思うくらいで、やり方は変わらないというのが印象でした。それで何が言いたいと言いますと、それはイタリア人も思っているのです。ダルコ先生と話をすると分かるのですが、「日本人は結構来るよね。でも日本がやっていることが、そんなに悪い事なの？」と言われます。ブルチ先生も日本大好きです。ダルコ先生が日本人からの質問で一番困るのは、「利用者さんにこの様な人がいますけどダルコ先生だったらどのようにしますか？」と聞かれることだそうです。

「僕は凄く素晴らしい精神科医では無くて、その利用者さんを見て、その利用者さんの人生を考えて初めてできるから、それは日本人がその利用者さんを見て的確に判断をしたら良いと思うよ。」とよく言われています。

という事で私が今トリエステの経験を話したのは、対人、対現場になった時に、決して日本人とイタリア人がやっている事はかけ離れていない。その大変さ、もう何回も自分の子供の首を絞める利用者さんとか、大変な人はイタリアにも沢山いて、それを何回も何回も、頑張って頑張って支援しているイタリア人と、一生懸命、倒れそうになりながら働いている日本人の皆さん、変わらないなと感じたのが印象のひとつです。



今回は折角の促進協会のリフレッシュセミナーなので、これで私の話は終わるのですが、私なんかシメの言葉を書いても締まらないので、ダルコ先生のお言葉をお借りして終わりにしたいと思います。リフレッシュセミナーは、勉強になる事が1つと、皆さんホッとして幸せになる気持ちの2つが大事だと思うので、ダルコ先生がサラッと言われた言葉を紹介します。「精神科医の仕事はね、利用者というパイロットが自分の人生である空を飛べなくなったときに、操縦席の横に一瞬だけ座るのだよ。だけど飛べるようになったらもう僕たちは降りていくのだよ。」とされていました。それからもう一つ、これは大分にダルコ先生が来日された時に、講演の場では無く講演の舞台裏で言われたのです。私に言われてもと思ったのですが、「利用者が、自らが書く人生ってあるのだよ。だけど患者さんとか利用者さんが書けなくなったりするのだよ。書けなくなるだけでは無く、ページを飛ばしたり、戻ったりするときに、一緒に寄り添って読んで、一緒に小説の文章に下線を引く存在が大事なのだよ。」とされていたので、皆さんに勝手にお伝えします。これは長野先生のところにダルコ先生が行かれた時にダルコ先生が話した内容です。「日本人も頑張っているから、そんなに色々な所から学んだりしなくても良いのではないの？この精神保健の世界はどここの国であっても支援者だってきついよね。患者さんもきついかもしれないけれど、支援者もきついよね。支援者はとてもきつくて、辛い時期もあるかもしれないけど、その時こそ沢山同じ支援者と語り合って、励まし合って、とにかく目の前にいる、支援すべき利用者さんに集中してください。自分もそうでなければ、やってこられなかった」と言われていました。勝手にダルコ先生の言葉を借りて、終わりにしたいと思います。

仁木美知子さんは、私がイタリア・トリエステに滞在しただけでは知りえなかったヴェローナ・アレッツォの事、それだけではなく日本の色々な実践のところを教えてくださいました。本当に感謝しております。本当に有難うございました。

これで発表を終わらせていただきます。



* 事務局からのお知らせ

○ 7月号原稿のお願い:会員の皆様、コロナ禍等により各地で今までにない取り組みが始まっているのではないのでしょうか？その取り組み、全国の仲間と共有してみませんか？原稿をお待ちしております。

—編集後記— 今回が最終報告となるリフレッシュセミナーは故仁木美知子を偲んでとして開いていただきました。3名の先生方からご講演をいただきましたが、彼女と二人で作りに上げてきたイタリアセミナーは特に思い出が強く色々な場面が思い浮かびます。参加者として加わった坂本さんは現地での合流や通訳として活躍頂くなどイタリアの記憶の中ではなくてはならない存在です。イタリアもコロナ禍で大変な状況ですが、早く皆様と共に再度イタリアを訪れる日が来ることを願っています。(M.Niki)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会 TEL090-1811-7119

